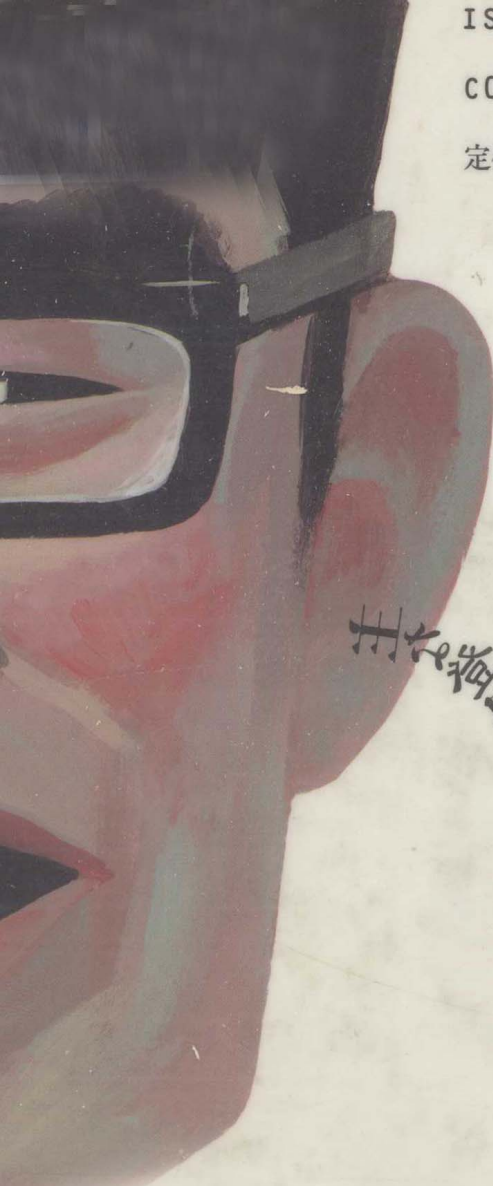


ISBN4-408-53147-2

C0093 P1400E

定価1400円(本体1359円)



人語集

清水義範



主な
登場人物

実業之日本社

主な登場人物

著者／清水義範

*

初版第1刷／平成3年5月10日

発行者／増田義和

発行所／株式会社実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替東京1-326

郵便番号104 電話 03(3562)2051〔編集〕 (3535)4441〔販売〕

*

印刷所／東京研文社

製本所／共文堂

*

© YOSHINORI SHIMIZU, Printed in Japan 1991

落丁本、乱丁本は小社でお取りかえいたします。

ISBN 4-408-53147-2

主な登場人物★目次

主な登場人物	7
ザ・ニュース・ウォッチ	31
近頃の若者は	53
ビデオ録画入門	73
只今留守にしております	97
朝礼の話題	119
テレホン娘	139
実用文書承ります	163

歴史ショート・ショート 決断	187
ショート・ショート 拝啓	195
私は船戸川事件をこう見る	199
問題は何ですか	225
陽光キラキラ霊場ガイド	247
覆面座談会	277
註釈物語	299
あとがき	320

カバー装画／浅賀行雄
装幀／安彦勝博

主な登場人物

主な登場人物

日本人作家による小説には、普通ついていないが、外国人作家の小説なんかによくついているのが“主な登場人物”という一覧表である。ミステリー系の小説には特によく見られるものだ。

あれは、一応、便利なものである。ミステリーだと、実に様々な人間が出てきて、みんなちょっとずつ怪しい、ということになっていることが多いから、出てくる奴全員に目を光らせていないといけないのだが、外国人の名前はどうも覚えにくい。前のほうに一度出てきただけの人間が、大詰めで意外な活躍をしたりすると、あれっ、これ誰だっけ、というような気分になったりする。そういう時、“主な登場人物”の一覧があるとそこを見て、被害者の兄、なんてあると、ああ、あの人物かとすぐに思い出すことができる。非常に簡単なメモ書き程度のもので、十分に役に立つから不思議だ。

ミステリーでなくても、名前のややこしい外国の小説には、できることなら“主な登場人物”

がついていてほしいと思う。

ナターリヤ・エゴロヴナ・ザルニーツィナとは一体誰のことだったろう、とか、ポルフィリイ・ペトロヴィチと、ピョートル・ペトロヴィチ・ルージンとは別の人物だったのかなあ、なんて、頭が混乱してしまうことは、非常にしばしばあることだからである。

私はドストエフスキの小説を読む時には、はがき大のメモ用紙に、登場人物表を作りながら読むようにしているくらいだ。自分でそれを作っていくと、人名がよく頭に入るのである。その上、あまりにもややこしい妙ちきりんな名前をメモしていくことには、変な楽しみがあったりする。

プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ・ラスコーリニコフの母の名だが、あんまりな名前でもなく笑えてくる。

というわけで、ドストエフスキほどではなくても、外国の小説は人名がややこしいのだから“主な登場人物”の表があつてほしいのである。

ところで、ミステリーなどについている“主な登場人物”の表というのは、普通はその小説の作者が作るのではなく、日本の出版社の編集者が、読者の便宜のために作ることが多い。だから、その作り方の上手下手で、読む前に謎が見抜けてしまうような場合もある。

〈主な登場人物〉

クリンス・ブルックス……私立探偵

アクリタス・ディゲニス……殺された男

マーニヤ……殺された男の妻

ビュシエ……殺された男の隣人

ヤムニッツァー……マーニヤの愛人

アントニン・ノボトニー……警官

フレッド・ジームンス……犯人

こういう登場人物表はよくない。物語の前に、いきなり「犯人」はないわけである。

しかし、「犯人」とこそ書いてはないものの、それに近いようなのは実際にある。

探偵がいて、他の登場人物が、その友人、その協力者、その妻、その息子、警官、無関係な死体発見者、とあって、最後に、被害者に妻を取られた男、なんていうのが出てくる。どう考えたってそいつが犯人である。

主な登場人物が三人というようなのも具合が悪い。

〈主な登場人物〉

マーストン・ヘフナー……私立探偵

ロバート・バラード……殺された富豪

ゲーリイ・スナイダー……非常に善良で小心な市役所職員

いっくら善良と書いてあったって、そいつが犯人に決まっているではないか。

レイモンド・チャンドラーの名著、『さらば愛しき女よ』の“主な登場人物”表を見てみよう。

〈主な登場人物〉

フィリップ・マローウ……私立探偵

大鹿マロイ……銀行強盗の前科者。大男

ヴェルマ・ヴァレント……元ナイト・クラブ「フロリアン」の歌手

ナルティ……七七丁目警察署の警部

ジェシー・フロリアン……「フロリアン」の元経営者の妻

リンゼイ・マリオ……ジゴロ風独身の男

アン・リアードン……元ベイ・シティ警察署長の遺子

ランドール……ロサンゼルス警察署殺人課の警部

グレイル夫人……病身の富豪を夫に持つ上流夫人

ジュールズ・アムサー……神経病医

セカンド・プランティング……アムサーに使われている用心棒のインディアン

ゾンダボーグ……病院を経営している怪しい医師

レアー・ブルネット……暗黒街のボス。賭博船二隻を持っている。

というのが名作『さらば愛しき女』の“主な登場人物”である。私は今、本の、その一覧表が出ているページからそれを書き写したところだ。

そして実は、私はこの小説を読んでいないのである。正直に白状すると、名高いチャンドラーのフィリップ・マローウ物を、一作も読んだことがないのである。とんでもない不勉強なのである。このことに嘘はないので、まず信じてもらいたい。

そこで、ひとつ無茶な実験をする。

この“主な登場人物”表から、この小説のストーリーを想像する、という正気の沙汰とは思えないようなゲームをしてみようと思うのだ。

もちろん、本当のストーリーとはまるで違った、もうひとつの『さらば愛しき女』になるに決まっているが、遊びだからいいじゃないですか、というわけだ。

えーとまず、私のスタート地点を明らかにしておこう。チャンドラーを一作も読んだことのない私だが、チャンドラー及びフィリップ・マローウについて知識がゼロというわけではない。普通に読書もしている人間として、あちこちから知識の断片は入ってくるのだ。

フィリップ・マローウ物が、ハードボイルド・ミステリーであることくらいは知っている。ハ

ードボイルドというのは大都会によく雨が降って、探偵が実にイキナ名科白せりふを口にして、現代風俗の裏なんかガリアルに描かれている、基本的には非常にロマンチックな物語である。私はそんなふうに理解している。

それから、あれは映画になった時の科白なのか、マローウの名科白をひとつふたつ知っている（と思っているが、記憶違いかもしれない）。

例の、

「タフでなければ生きていけない。優しくなければ生きていく資格がない」

というのと、

「きのう。そんな昔のことは覚えていない。明日。そんな先のことはわからない」
というやつである。

ここまで読んで、わっ、清水は記憶違いしてるぞ、くーっ、いらつくなあ、と思っている人が沢山いるかもしれない。でも、あえて調べずに書いてしまう。そういうルールだからである。

あと、今書名は思い出せないが、ハードボイルド・ミステリーについて論じたり、解説しているような本は、いくつか読んでいるはずである。植草甚一氏の本とかで、ストーリー紹介を読んだことだってあるかもしれない。

ただ、その内容をくつきりと思いつくことはできない。私の立場は大体そんなところである。さあ「主な登場人物」表から、ストーリーをでっちあげよう。

まず、フィリップ・マーロウ。これはよろしい。主人公の、ハードボイルドな探偵である。

次の大鹿マロイ。これは多分、いい人である。前科者、とはあるけれど、なんとなくいい奴という気がする。大鹿とか、大男とか、やたらに大きいことが強調されているところに、男っぽい奴、という思い入れが感じられるのだ。こういう人間は案外、マーロウと奇妙な友情で結ばれているかもしれない。

次のヴェルマ・ヴァレント。これがヒロインでなかったら素直にあやまる。どう考えても、美人で、マーロウの心が動かされる女である。『さらば愛しき女よ』の、愛しき女はこの人物である。だって元歌手で、名前がヴェルマ・ヴァレントなのだ。いい女優がやりそうな役名ではないか。ただしこの女性には、何か秘密を持っている。なぜそう思うかというと、題名が『さらば愛しき女よ』だからである。ラストシーンでは、マーロウと別れるのだ。雨がびそびそ降っている裏街なんかで、のことかもしれない。

（大違いだったらしよう。なんかドキドキしてきちゃったなあ）

ナルティ。これは警部。ちよつとわからないなあ。事件に最初に関係する警部だろうか。ところで、事件とは何だ。

ジェシー・フロリアン。ヴェルマの働いていたナイト・クラブの元経営者の妻だそう。なんで妻しか出てこないのか、である。どうも、その経営者というのが、殺されたのか、行方不明なのか、とにかく被害者なんだと思われる。話はそこから始まっているはずだ。